

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18H00722

研究課題名（和文）帝国日本と東アジアスポーツ交流圏の形成

研究課題名（英文）Imperial Japan and the Emergence of Interregional Network of Sports in East Asia

研究代表者

高嶋 航（Takashima, Ko）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：10303900

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,800,000円

研究成果の概要（和文）：従来、東アジアのスポーツ史研究がナショナルヒストリーとして展開してきた結果、帝国時代の日本のスポーツ、さらには帝国崩壊後の東アジアのスポーツが全体としてとらえられてこなかった。また、満洲は日本、中国双方のナショナルヒストリーから排除され、近年まで研究の対象となることがなかった。

本研究は満洲におけるスポーツの実態解明に重点を置くことで、スポーツ史研究の地理的空白を埋めるとともに、帝国日本のスポーツの全体像を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東アジアでは、スポーツ史研究だけでなく、スポーツ界そのものが国ごとに分断されてきた。日中韓の激しいライバル意識は、競技力の向上をもたらす一方で、スポーツ界をこえたさまざまな軋轢や摩擦を生んできた。帝国日本のスポーツを明らかにすることで、東アジアの分断をもたらしたメカニズムを理解し、その解決に役立てることができるであろう。

研究成果の概要（英文）：In East Asia, historical research has been done within the framework of national history. As a result, sport in Imperial Japan as well as sport in post-colonial East Asia has never seen in its entirety. In addition, being excluded from national histories of both Japan and China, little has been known about the sport in Manchuria.

By focusing on sport in Manchuria, this study filled the geographical gap in sport history and provided an overall picture of sport in Imperial Japan.

研究分野：東洋史

キーワード：帝国日本 スポーツ

1. 研究開始当初の背景

かつて夏の甲子園野球大会(全国中等学校優勝野球大会)に朝鮮、台湾、満洲の代表が参加していたことが示すように、帝国時代の日本のスポーツは、いわゆる「内地」のみならず「外地」を包含していた。「内地」と「外地」、そして「外地」と「外地」の間だけでなく、「内地」「外地」とその周辺地域(中国やフィリピン)の間でも実はさまざまな交流が展開していたのだが、その実態はあまり知られていない。

従来、東アジアのスポーツ史研究がナショナルヒストリーとして展開してきた結果、帝国時代の日本のスポーツ、さらには帝国崩壊後の東アジアのスポーツを全体としてとらえる研究がなされてこなかったのがその主たる原因である。また、日本、中国双方のナショナルヒストリーから排除された満洲は研究の対象となることがほとんどなく、帝国日本スポーツ史における地理的空白となってきた。

そもそもこのような問題意識を持つようになったのは、研究代表者(高嶋)が2012年に『帝国日本とスポーツ』を刊行したさい、スポーツ史に帝国日本という視角がほとんど存在しないことに気づいたからである。同書は帝国日本というよりは、20世紀前半の東アジアのスポーツを描いたものだが、そのためには東アジアで最も重要なアクターであった帝国日本をよりよく理解する必要があった。そして、その最大の障害が満洲のスポーツであった。満洲のスポーツの実態を解明すべく、2016年に満洲スポーツ史研究会を立ち上げ、本研究開始までの2年間、資料を収集整理するという基礎的な作業を行った。信頼できる先行研究がほとんどない状況のもと、まずどのような資料が利用可能かを見定めるところから始めなければならなかった。この過程で、スポーツに関する膨大な新聞記事が存在することを突き止めた。この膨大な資料を収集するだけでも多大な労力が必要であることから、5年のプロジェクトとして本研究をスタートさせた。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀前半の帝国日本におけるスポーツの全体像を実証的に解明し、それを東アジアスポーツ交流圏のなかに位置づけることで、近現代東アジアスポーツ史を構築するための基盤を創出することを目的とした。そのためには、(1)満洲におけるスポーツの実態を解明して地理的空白を埋める、(2)帝国日本内の各地域(「内地」、満洲、朝鮮、台湾)間の関係性を明らかにする、(3)帝国日本、中国、フィリピン(この三者が極東選手権競技大会を構成し、恒常的に交流していた)の関係性を明らかにする、ことが必要となる。この3つはレベルを異にしてはいるが、それぞれ間に密接な連関があり、並行して研究を進める必要がある。たとえば、(1)の満洲におけるスポーツの実態についていうと、在満日本人のスポーツは内地のそれに強く影響を受けていたし、隣接する朝鮮や中国との交流も盛んだった(台湾やフィリピンとの関係は比較的薄かった)。それゆえ、(1)の課題を明らかにしようとするれば、内地や朝鮮や中国のスポーツを知ることはもちろん、それぞれの関係性をも考慮しなければならない。

如上の作業を通じて、はじめて近代東アジアのスポーツが理解できるのであり、また現代にいたる東アジアのスポーツもその基礎のうえで理解されねばならないのである。

3. 研究の方法

「研究の目的」に挙げた3つの課題は、先ほど述べたように同時並行的に進めるべきものだが、まずはブラックボックスの状態にあった満洲スポーツの実態解明に重点的に取り組むこととした。その基礎作業として、『満洲日日新聞/満洲日報』(1907-1943年)に掲載されたスポーツ関連記事をすべて収集する作業に取り組んだ。さらに、『大連新聞』、『新京日日新聞』、『遼東新報』(以上、日本語新聞)、『盛京時報』、『泰東日報』、『満洲報』(以上、中国語新聞)、『Manchuria Daily News』(英語新聞)にも探索の範囲を広がった。このほか、『満洲体育』(大満洲帝国体育連盟機関誌)、『満蒙年鑑』、『協和』(満鉄社員会機関誌)などの雑誌、在満学校の校内誌や同窓会誌、内地のスポーツ資料に掲載された満洲関連記事など、可能な限り多くの資料を収集することにとめた。

資料調査は国内外で実施した。国外調査は中国、台湾、スイスなどで行った。当初の予定では、韓国やアメリカも含まれていたが、新型コロナウイルスの流行によって海外渡航が困難となったため、中止せざるをえなかった。中国ではそれ以前から政治的理由により外国人による資料調査が困難になっており、大連図書館での資料閲覧を何度も交渉したが、ついに許可が下りなかった。したがって、中国での調査は当時の史跡をめぐることが中心となったが、それはそれで貴重な経験となった。台湾では満洲で活動した台湾人アスリートや台湾のスポーツに関する資料を、スイスでは国際オリンピック委員会と満洲国体育協会の関係に関わる資料を収集することができた。またこの間、日本(とくに国会図書館)のみならず、世界で各種資料の電子化とオンライン公開が進み、当初は思いもよらなかった資料を手に入れることができたのは不幸中の幸いであった。

資料調査と並行して、収集した資料の検索を容易にするために、年表形式の資料集を作成した。

記事が膨大なだけに年表も膨大になり、その字数は200万字を優に超えるものとなった。この作業に非常に多くの労力と時間をとられたが、これによって満洲スポーツの歴史を手早く調査することが可能となった。一例として、「野球」で検索してみると6千件ほどがヒットする。このままではあまりに多いので、さらに検索項目を追加して、記事数を絞る必要はあるが、たとえば野球の起源を知りたければ、最初の数十件の記事に目を通すだけで、おおよその状況が判明する（実際には、ずっと後になって野球の始まりを回顧するような文章があるので、最初の数十件では不十分である）。日本、中国、朝鮮、台湾の主たる新聞はデータベースを利用することができるのに対して、満洲についてはこうしたデータベースが存在しないため、この年表の利用価値はきわめて高い。

資料の膨大さからうかがえるように、満洲スポーツの歴史を明らかにするといっても、じつは相当大変なことである。満洲国建国（1932年3月）以前については、スポーツの種目ごとにその起源と発展を整理した（高嶋航「満洲スポーツ史話（I～III）」）。これとは別に、各メンバーがそれぞれの関心に沿って、テーマを設定し研究を進めた。具体的には、バレーボール、建国体操、明治神宮大会、女子スポーツ、満洲国代表、企業スポーツ、在満朝鮮人、在満台湾人、武道であり、民族、ジェンダー、階層、スポーツ種別の点からみても多彩なテーマで、満洲スポーツの全容をうかがうことができる豊富なラインナップとなった。各メンバーはこれらのテーマについて、それぞれの専門（歴史学、人類学、社会学、メディア学など）の方法論に基づいて研究を進めた。

当初は年2回のペースで研究会を開催し、メンバーの研究の進捗状況を確認め合うとともに、満洲、あるいは帝国日本や東アジアのスポーツに関する基礎知識を共有することにつとめた。メンバーの居住地が北は札幌から南は那覇までと分散していたため、集まる機会は多くとれなかったが、ZOOMを活用できるようになって、研究会の頻度は増え、年4回ほど研究会を開催した。2022年度末には、「満洲国とスポーツ」と題するオンラインシンポジウムを2回開催し、外部の識者から貴重な意見を頂くことができた。このほか、各メンバーがさまざまな学会、研究会で本研究の成果を披露してきた。その結果、満洲のスポーツ、帝国日本のスポーツ、あるいは東アジアのスポーツへの関心はこの5年間で確実に高まった。

4. 研究成果

本研究のメンバー全員が参加した成果としては、高嶋航、金誠編『帝国日本と越境するアスリート』（塙書房、2020年）と高嶋航、佐々木浩雄編『満洲のスポーツ史：帝国日本と東アジアスポーツ交流圏の形成』（青弓社、2023年刊行予定）がある。

『帝国日本と越境するアスリート』では、民族や性別を異にする約40名のアスリートたちが内地、満洲、朝鮮、台湾を越境した軌跡をたどり、帝国日本内にはりめぐらされていたスポーツのネットワークを浮かび上がらせた。このネットワークは、競技の種類によって違いがあり、また時期によっても変化した。さらに、このネットワークには民族、ジェンダー、階層の壁が存在した。そのため本書に収録したアスリートも日本人男性エリートが多数を占めることとなり、台湾人や朝鮮人の女性はほとんど取り上げることができなかった。本書は、研究目的の（2）帝国日本内の各地域間の関係性を明らかにする、に該当する研究成果といえる。

『満洲のスポーツ史』は、研究目的の（1）満洲におけるスポーツの実態を解明する、に該当するものである。3. 研究の方法で列挙したテーマに関する各メンバーの論文を、「労働と定着」、「民族の移動と統治」、「組織化と「国際」関係」の3部に分けて収録した。いずれの論文も、満洲を対象にしなが、満洲で閉じることがなく、内地・朝鮮・台湾など帝国日本の各地や中国にも筆が及んでいる。研究目的の（1）（2）（3）すなわち満洲、帝国日本、東アジアは截然と区別することが難しく、満洲を描こうとすればどうしても帝国日本や東アジアに触れないわけにはいかないということが本書によっても示されたわけである。副題の「帝国日本と東アジアスポーツ交流圏の形成」（これは本研究課題名でもある）は、まさにこうした意図を言わんとしたものである。本書は満洲スポーツ史に関する最初の書籍であり、今後の研究の道しるべとなることを想定して、満洲のスポーツ史を概観した序章、基本資料のリスト、年表を付した。原稿はすでに提出済みで、近く刊行されることになるだろう。

以上、2冊の単行本のほか、各メンバーが個別に発表した著書、論文がある。

高嶋は満洲スポーツ界の総元締めだった岡部平太の評伝（『国家とスポーツ：岡部平太と満洲の夢』）、戦後東アジアにおけるスポーツを通じた外交を論じた『スポーツからみる東アジア史：分断と連帯の二〇世紀』の2冊の単行本を刊行し、「満洲・台湾と甲子園」「女子野球の歴史を再考する：極東・YMCA・ジェンダー」「満洲における軍隊とスポーツ」など、研究目的の（1）～（3）に相当する諸論文を発表した。金は朝鮮スポーツ史に関わる2冊の書、『近代日本・朝鮮とスポーツ：支配と抵抗、そして協力へ』と『孫基禎：帝国日本の朝鮮人メダリスト』を上梓したほか、満鮮交流に関わる「帝国日本と国境のスポーツ史：安東・新義州のスポーツ交流と鴨緑江のスケート」、日本の植民地支配とスポーツを論じた「帝国日本のスポーツと民族の「融和」」、そして「リットン調査団と満洲国建国記念連合大運動会：関東軍による宣伝・宣撫工作としてのスポーツ」などを発表している。他のメンバーもそれぞれ本研究に関わる論文を発表しており、これらは今後帝国日本のスポーツを研究するさいの確かな基礎となるはずである。

研究開始当初、満洲スポーツに関する実証的研究がほとんどない状態から出発したことを考えると、本研究の3つの目的のうち、（1）は十分に果たしたといえる。（2）は『帝国日本と越

境するアスリート』で、帝国日本という視角の重要性和有効性の一端を示すことができた。(3) はもともと努力目標という位置づけだったが、やはり力及ばなかった。とはいえ、繰り返しになるが、(1)～(3)は密接に関わっており、(1)、(2)の研究を推進したことで、(3)についてもある程度の見通しが立った。

本研究を通じて新たな課題も見えてきた。帝国日本が崩壊したあと、東アジアは冷戦の時代に入っていくが、そこで帝国日本時代の遺産がどのように継承されたのか、それが戦後の東アジアスポーツ界にどのような影響を与えたのかが検証される必要がある。研究代表者(高嶋)は『スポーツからみる東アジア史』で戦後の東アジアスポーツ界を素描した。同書を通じて、戦後の東アジアで展開されたスポーツをめぐる外交交流は、冷戦の力学のみならず、帝国時代の影響を強く受けていたことが明らかになった。同書では言及できなかったが、たとえば日本独自のスポーツである軟式庭球(ソフトテニス)は、元植民地である韓国や台湾で依然として実践されていたものの、西側世界に属するフィリピンでは普及しなかった。元植民地でありながら東側世界に属することになった北朝鮮でも軟式庭球の痕跡は見られない。人的な関係性はより明瞭である。李相佰や孫基禎のように、植民地時代に活躍したアスリートが韓国スポーツ界の指導者となることで、かつての帝国日本スポーツ界の人的ネットワークが生かされることになった。逆に台湾では、大陸からやって来た中国国民党系のスポーツ関係者がスポーツ界を牛耳ることで、帝国日本時代の人的ネットワークが抑制される結果となった。こうした事象は帝国日本のスポーツへの理解があつてこそ、よりよく理解できるものである。帝国日本のスポーツに対する理解がある程度得られた今、戦後の東アジアスポーツ史は次に取り組むべき重要課題と考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高嶋航	4. 巻 60
2. 論文標題 満洲スポーツ史話(1)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都大学文学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 163-262
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 菅野敦志	4. 巻 25
2. 論文標題 ラケナモ：1940年 東京オリンピック を夢見た台湾原住民陸上選手	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名桜大学紀要	6. 最初と最後の頁 99-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 金誠	4. 巻 88
2. 論文標題 帝国日本と国境のスポーツ史：安東・新義州のスポーツ交流と鴨緑江のスケート	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史潮	6. 最初と最後の頁 30-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高嶋航	4. 巻 なし
2. 論文標題 満洲・台湾と甲子園	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 白川哲夫、谷川穰編『「甲子園」の眺め方』	6. 最初と最後の頁 140-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 高嶋航
2. 発表標題 東アジアとオリンピック
3. 学会等名 歴史学研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高嶋航
2. 発表標題 劉長春と于希渭：中国と満洲国を代表した関東州生まれのアスリート
3. 学会等名 東アジア近代史学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高嶋航
2. 発表標題 大連YMCAと「文明化の使命」
3. 学会等名 スポーツ史学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高嶋航
2. 発表標題 スポーツ史と私
3. 学会等名 スポーツ社会学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金誠
2. 発表標題 帝国日本のスポーツと民族の「融和」
3. 学会等名 東アジア近代史学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤田大誠
2. 発表標題 帝国日本の神社とスポーツ
3. 学会等名 東アジア近代史学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sasaki Hiroo
2. 発表標題 Olympic Glory and the Rise of Nationalism in Imperial Japan
3. 学会等名 International Society for the History of Physical Education and Sport（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kin Makoto
2. 発表標題 Building the political and social relationships for Korean Japanese citizens through "Karate" before and after World War
3. 学会等名 2019 World Martial Arts Masterships Committee International Academic Conference (WMC)（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木浩雄
2. 発表標題 帝国日本のオリンピックと国民体育：スポーツの国家的意義と自律性をめぐって
3. 学会等名 教育史学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 高嶋航、金誠	4. 発行年 2020年
2. 出版社 塙書房	5. 総ページ数 300
3. 書名 帝国日本と越境するアスリート	

1. 著者名 高嶋 航	4. 発行年 2020年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 352
3. 書名 国家とスポーツ 岡部平太と満洲の夢	

1. 著者名 高嶋航ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 一色出版	5. 総ページ数 652
3. 書名 スポーツの世界史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤田 大誠 (Fudita Hiromasa) (20407175)	國學院大學・人間開発学部・教授 (32614)	
研究分担者	中嶋 哲也 (Nakajima Tetsuya) (30613921)	茨城大学・教育学部・准教授 (12101)	
研究分担者	金 誠 (Kin Makoto) (40453245)	札幌大学・地域共創学群・教授 (30102)	
研究分担者	束原 文郎 (Tsukahara Fumio) (50453246)	京都先端科学大学・健康医療学部・准教授 (34303)	
研究分担者	浜田 幸絵 (Hamada Sachie) (50636769)	島根大学・学術研究院人文社会科学系・准教授 (15201)	
研究分担者	菅野 敦志 (Sugano Atsushi) (70367142)	共立女子大学・国際学部・准教授 (32608)	
研究分担者	佐々木 浩雄 (Sasaki Hiroo) (80434348)	龍谷大学・文学部・准教授 (34316)	
研究分担者	新 雅史 (Arata Masafumi) (90750513)	流通科学大学・商学部・講師 (34522)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------